

滋賀県立琵琶湖博物館協議会 令和2年度第1回会議

日 時 令和2年（2020年）12月4日（金）

13時10分～15時10分

場 所 琵琶湖博物館1階セミナー室

会 議 次 第

1 開 会

2 会長・副会長の選出について

3 議 題

(1) 令和2年度の博物館活動について

(2) 新琵琶湖博物館創造基本計画行動計画

令和2年度取組状況について

(3) 第三次中長期計画について

(4) その他

4 閉 会

[13時10分 開会]

1 開会

○司会（副館長）：定刻となりましたので、ただいまから滋賀県立琵琶湖博物館協議会、令和2年度第1回会議を開催させていただきます。

開会に当たりまして、館長の高橋がご挨拶申し上げます。

○館長：皆様、こんにちは。

きょうは大変ありがとうございます。例年ですと、第1回目のこの協議会ということになりますと、もう少し早い時期に行っていたのでございますけれども、今年は特別なことがあります、遅れてこの日の開催ということになりました。

遅れましたのは、この協議会だけではございませんで、本来であれば、7月にオープンするはずのグランドオープン、それからその後の企画展示、そして秋には国際シンポジウムなども予定していたんですけれども、今年は全て延期あるいは中止ということになりました。

思い返してみますと、1月に新型コロナウイルス感染症の患者の方が日本でも見つかりまして、そして2月、3月とだんだん増加していく中で、学校も閉鎖ということになりました。博物館も日本中の博物館が閉鎖ということになりまして、当館でも2月28日から6月1日までの間、3か月間、臨時休館ということで、博物館を閉めさせていただきました。この3か月間にどのようなことをしたのかというのは、後ほど担当のほうから説明があるかと思っておりますけれども、3か月遅れまして、しかしそれでも、おかげさまで10月10日にはリニューアルのグランドオープンができましたし、そして引き続いて企画展示のオープニング、こういったことをやることができました。

リニューアルに関しましては、この場でもいろいろ議論いただきまして、特にUD評価などもいろいろご議論いただきましたけれども、委員の方それぞれのお立場から、ご意見やいろいろ評価していただきましたおかげで、自分たちで言うのも何ですけれども、今のところ、評判がいいように聞いておりますので、これは本当に皆様方のおかげだと思っております。改めまして、お礼申し上げます。どうもありがとうございました。

第3期リニューアルで新しくなりましたA・B展示室、あるいは企画展示に関しましては、この協議会終了後に、また皆様方にも見ていただけるように準備しているように聞いておりますので、もし委員さんの中でご覧になってない方がいらっしゃいましたら、ぜひ一度ご覧いただいて、また改めて、いろいろご意見を賜ればというふうに思っております。

本日の会議では、今年度の活動について、あるいはこれから私たちの活動の指針になります中長期の計画案について、いろいろ皆様方からまたご意見を頂戴することになると思いますけれども、継続して委員としてやっていただいた皆様方、また新たに参加していただいた皆様方、ぜひ忌憚のないご意見を頂戴いたしまして、ご審議いただけましたらと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会（副館長）：改めまして、私、本日の司会をさせていただきます副館長の馬淵と申します。よろしくお願いいたします。

会議に入ります前に、今回、第13期の琵琶湖博物館協議会ということで、最初の会議でございますので、事務局のほうから、委員の皆様を一人お一人ご紹介させていただきたいと思います。

名簿の順に、こちらのほうから順番にご紹介をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

（委員紹介）

（事務局紹介）

○司会（副館長）：それでは、早速議事に入らせていただきますが、当協議会の定数は、「琵琶湖博物館の設置および管理に関する条例」の第7条の規定によりまして、15人以内となっております。

現在、15人中13人の方々にご出席していただいております。これも条例の第9条で、半数以上の出席で会議が成立するということになっておりますので、本日の会議は成立しているということでさせていただきます。

今回は、第13期の琵琶湖博物館協議会の最初の会議でありまして、会長が決まりますまで、事務局のほうで議事進行をさせていただきたいと思います。

2 会長・副会長の選出について

○司会（副館長）：それでは、まず、会長、副会長の選出についてでございますが、条例の第8条では、委員の互選により会長・副会長を定めるということで規定されております。

皆様、いかがさせていただきますでしょうか。

もしよければ、事務局一任でお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

（拍手）

○司会（副館長）：ありがとうございます。

それでは、皆様のご同意をいただきましたので、事務局一任ということでさせていただきます。

それでは、事務局といたしましては、これまでの経過もございますので、会長には山西委員をお願いしたいと思っています。

それから、副会長には土井委員をお願いいたしたいと思っていますが、よろしいでしょうか。

(拍手)

○司会（副館長）：ありがとうございます。

それでは、皆様のご同意をいただきましたので、会長には山西委員、副会長には土井委員にご就任をお願いしたいと思います。

それでは、早速でございますが、山西委員には会長席のほうにご移動をお願いいたします。

それでは、以後の議事の進行は、山西会長のほうをお願いいたしたいと思います。よろしくをお願いいたします。

3 議題

(1) 令和2年度の博物館活動について

○会長：ただいまご指名いただきました山西です。引き続きということになりますが、今回は新しい委員の方々がたくさんお見えですので、改めてよろしくをお願いいたします。

時間も限られていますので、早速、議事のほうに入らせていただきたいと思いますので、ご協力よろしくをお願いします。

まず、議題（1）令和2年度の博物館活動について、事務局からご説明をお願いしたいと思います。

○事務局：事務局の企画調整課長の芳賀と申します。よろしくをお願いいたします。

資料のほうは、資料1ともう一つ、1枚物でカラーになりますが、ユニバーサルデザインに配慮した整備ということになります。

それから、関連するものとして、こちらのほうにグランドオープンに関連する新聞の記事が置いてあります。コピーができないので、回覧させていただきますけれども、ご覧いただければと思います。

今年の活動についてということでご説明していきます。従来なら事業ごとに、今年は例えば、観察会は何件ありましたとか、こんなイベントをこういうふうにしましたとかいう形でいきますが、先ほどの話にもありましたように、コロナの影響もありまして、

たくさん中止になったものがありました。という関係で、今回は事業ごとにまとめるのではなくて、時系列ごとにどういうふうに対応してきたかという形で紹介させていただきたいと思います。

資料1のほうを見ていただきますと、まず先ほどもありましたけれども、2月29日から臨時休館に入りました。これは県の方針ということで休館を決定して、この時期というのは、4月以降になりますと、県境の往来も止まるというような状況だったわけです。一度3月のところで、少し収まってきたかなということで、再開の動きがありましたが、当館の場合は資材が不足しているということと、それから県境を越えてのお客さまが多いということで、休館を継続ということになりました。その結果、95日間、6月1日まで休みということになったわけです。

その間、私たちは何をしていたのかということですが、もちろん、研究ですとか、資料整理ですとか、通常の業務は続けておりました。それからコロナ対策の準備をしていく、あるいは展示室には展示交流員さんという方たちがいて、いろいろお客様との接点を持っていますが、そういう方たちはこの時ということで、研修をずっとされて、後で紹介します「おうちミュージアム」のグッズ開発とかもしておりました。

その中で、休館中でもできることということで、そこにカラーで挙がっておりますが、「おうちミュージアム」というのをインターネット上でやりました。

「おうちミュージアム」というのは琵琶湖博物館のオリジナルではなくて、北海道博物館が提案している活動で、いろんな博物館がホームページでサービスの提供を始めましたが、これを「おうちミュージアム」と名づけて、みんなでやりませんかという提案をしてくださったので、それに乗る形でやっております。

左上のところに、トップページバナーというのがありますが、この「おうちミュージアム」というバナーも北海道博物館のほうでつくられたもので、共通で使わせていただいたものということになります。

まずは既存のできる素材を提供して、それから制限がステイホームからステイホームカントリーになったあたりからは、観察会用の資料とかも提供したり、あるいは交流員さんが開発したツールも載せたり、それからユーチューブにも動画を載せるというようなことをやっておりました。これについては、また後ほど詳しく説明させていただきます。

5月に入りますと、そろそろ再開に向けての準備というのが動き始めます。一番大変だったのは、再開するとして、どのようにお客様を受け入れるかということで、その体制を組むということでありました。衛生資材とかの購入も大変でしたし、当時はマスク

が売り切れていたり、アルコールが全然手に入らなかったり、そういうのがひどかったわけですが、アルコールとかの資材に関しては、サポーター企業様とか、あるいはマスクに関しては中国から寄贈いただくなどして、着々と準備を進めていったわけです。

6月2日より通常開館を始めましたが、3密を防ぐということがありましたので、館内の人数を500人に制限するということにしました。

当初やっていたのは、500人に設定して、ずっと入り口でカウントをしていって、500人に近づいたら、整理券を配るという形でした。整理券の配り方を工夫することによって、いつときに入ってくる人数を制限して、全体を超えないようにするという形です。

その1つの例が、8月13日（日）の1日の入館者数です。450人になったところで配って、このグレーの折れ線のところが館内の人数ですが、こういう形で推移するようにしていったわけです。

ただ、この方法は、ちょっとお客様には大変だったわけで、博物館に来るまで入れるかどうか分からない。来たときに整理券が配られますが、日によっては、昼で整理券がなくなるというようなことが起こります。私たちもツイッターで随時、逐次情報を流していったりしましたが、2時間待ち、3時間待ちということで、諦めて帰られる方もいらっしゃいました。それでも待つくださる方もいたということですが、非常に大変な仕組みでありました。私たち自身も、交通整理に当たっていたので、ほかの業務そっちのけで、そういうのにかかり切りというような状況でした。

そうした中ですが、全体に落ち着いてきて、9月に入りますと、イベントなどを再開します。

主催事業として、田んぼ体験教室、里山体験教室、それからプランクトンビンゴというのは、顕微鏡でプランクトンを見る観察会ですが、そういったものを3密にならないようにしながら、随時始めていったわけです。

そのほかに、共催事業でもやはり、そういう配慮のあるものに関しては受け入れをさせていただいています。子どもロケット体験教室であるとか、景観づくりチャレンジ隊、これは草津市と大津市の事業ですが、博物館でワークショップをやって、その後、船に乗って琵琶湖の景色を体験するというような事業です。

これと並行して、9月からは学校団体の受け入れを始めております。予約自体は7月から始めています。これは、館内人数を制限する関係で、エクセルを使って管理シートをつくりまして、電話で受け入れて、昼時にどうしても集中しますので、学校と相談させていただきながら、ちょっとここは時間をずらしてくださいという感じで、調整しながらやってまいりました。これは学校を主に念頭に置いていましたので、平日中心で、

土日に関しては、団体は受け入れない、これは今でも継続しております。

先ほどお話ししましたように、整理券方式が大変だということがありましたので、事前予約の仕組みを導入しました。今、博物館のホームページにいきますと、その図にありますような予約の画面が出てきます。30分ごとに入館できる時間を区切ってありまして、それぞれの時間に、あと何人残っていますというのが出てまいります。これを使ってインターネットで予約をしていただくという形になります。

インターネットで予約ということになりますと、インターネットが使えないという方も当然いらっしゃいます。そういう方に関しては、空き枠があれば入れるようにすることで、窓口のほうで対応をしております。電話での予約というのは、ちょっと受け付けていませんが、そういう形でやっております。

これにしたことによって、運用上の利点としては、整理券方式のときよりも、多くの人が入れるというのが一つと、もう一つは、来られる方があらかじめ、自分の来る時間が分かっていますので、来るまで何時間待ちか分からないという状況は解消するということになっております。インターネットのツイッターとかを見ている方も、「予約制なので、安心して入れました」というようなご意見もいただいているので、そのところはよかったかなと思います。

ただ、運用上の課題としては、やはり予約できない人が一定数いるとか、それから問い合わせがやはり結構多かったです。これはだんだん説明を改善していくことで直っていったわけですが、いまだに少しだけあります。

あとは、予約システムにしたら、私たちが解放されるかと思ったら、ちっとも解放されなくて、相変わらず予約の確認とかでやっておりますので、なかなかその辺がまた大変かなというのがあります。

もう一つ、これはグランドオープン後にこの予約システムを導入していますが、予想外だったことがありました。入る時間を指定して、出る時間は好きにという形でやりますが、最初、平均滞在時間は2時間で想定しておりました。ところが、蓋を開けてみますと、人数が本当にぎりぎり、どんどんどんどん来ってしまう、おかしいなと思って見たら、平均滞在時間がグランドオープン後、3時間半に伸びていたというのがありまして、それに合わせてシミュレーションを変えて、今は人数をまた調整しております。

という形で、できるだけ多くの方に快適に利用していただくようにということで進めてきたわけですが、10月に入りまして、ようやく遅れていましたリニューアルのグランドオープンができました。

今回は、メディア向けに前日に別枠の内覧会も設けまして、32社・44人来ていただ

いて、その結果が今、回覧していただいているように、たくさんの記事になっているわけですが、内覧会を10月8日、1,271名に来ていただいて、グランドオープンを10月10日にしております。

そちらには、グランドオープンのセレモニーの様子がありますが、左上の写真、分かりますでしょうか。なぜ琵琶湖博物館でロケットが飛んでいるかというところ、これは9月に来てくださっていた「子どもロケット体験教室」のNPOの方たちに、おめでとうのロケットを打ち上げていただいたという形になります。子どもたちがつくって打ち上げたロケットになります。

グランドオープンの広報、そこにありますように、今回、たくさん載せることができたのと、それから関西一円で大きく取り上げられたというのが特徴となりました。

それから、新聞の記事のほうを見ていただくとわかりますが、開館したというニュースだけでなく、細かい情報、例えばユニバーサルデザインにすごく注目しているというようなことも記事の中で取り上げられています。こちらのほうの1枚物のところに、私たちのほうでも、ユニバーサルデザイン、この辺を配慮しましたよということでもめたのがありますが、こういったところも評価していただいているということになります。

その後、グランドオープンから1週間たちまして、企画展示を開きました。

それから、共催によるアトリウムでの展示というのも随時行っております。県の農政課ですとか、「企業の日」ということで、伊藤忠商事様に展示をしていただいたという形になります。

最後になりますけれども、こういった中で研究とか資料整理のほうが進んでいった中の成果の一つとして、「田んぼの生きもの全種データベース」の公開というのができております。そこにあるのは琵琶湖博物館の電子図鑑というものですけれども、その一番左下のところに、田んぼの生きものデータベースが出ています。

これと連動しまして、なぜ田んぼには多様な生き物がすむのかという本も発行しております。

ということで、コロナで塗り潰された状態ではありましたが、いろいろと私たちも活動を続けてまいりました。

以上、報告を終わらせていただきます。

○会長：ありがとうございます。

例年とは全く異なった状況で、話題には事欠かないと思います。コロナのこともありますし、リニューアルのこともあります。ということで、グランドオープンは非常に好

評だということですがけれども、この場では、もうお褒めの言葉は省略していただいて、これからの館の活動に役立っていくような、そういうご意見を忌憚なくおっしゃっていただければというふうに思っていますので、この間の一連の博物館の事業について、何からでも結構ですので、皆さんのほうからどんどん挙手をしていただいて、ご発言いただきたいと思います。よろしくをお願いします。

- 委員：今いただいたご説明の中で、途中から予約方式に切り替えて、スタッフの皆さんの負担が減るかと思ったら、減らなかったという話を伺って、そうなのかと思って衝撃を受けたんですけれども、大学もいろいろなものが停止しまして、それから私が関わっています年縞博物館もいろいろなものが停止しまして、どっちがいいのか分かりませんが、個人的なことを申し上げますと、あまりじたばたしなかったんです。無理なものは無理であると。来られない人は諦めてくれと。

何が言いたいかという、その間に一時的に、皆さんがオンラインという解決に慣れるまでの時間の間に、すごく仕事はかどる時間がありました。この数年間でこんなに研究が進んだ2か月はなかったというすばらしい期間でした。

もちろん、博物館としてのサービスを維持することは大事だと思うんですけれども、私、前々から言い続けていますが、博物館の求心力を維持するために一番大事なのは、研究力だと思うんです。なので、チャンスと捉えて、手を抜けるところは抜いて、こんなときだからこそできることというのは、もちろんオンラインでサービスを配信することも大事ですが、ご自身の研究に目を向けるチャンスとして使っていただけたらと思います。

- 委員：本業は、障害者施設の施設長をやっております、なおかつ、実は例の東日本大震災のときに、福島県から避難してきたという経緯もあって、福島県時代は福島県のユニバーサルデザインの一応研究員をやらせてもらっていたということもありましたので、今回、このユニバーサルデザインのところを主に関わらせていただきました。私も、グランドオープンの前日ですか、呼ばれて、自分の目でいろいろ確認させていただいて、非常に行き届いているなと思いました。

特に、今、こういう視点が非常に大事で、私の関わっている障害のある方は重症心身と言われる重度の寝たきりタイプの方々のところの施設長をやっております。こういうストレッチャータイプの方の視点で展示が確認できるとか、そういうのは非常にありがたい配慮ができていますということで、当時、私が福島県でやっていたんですが、福島県にも幾つか博物館がありますが、それよりもレベルが上の状態でやっていただいているなと思いましたので、非常にうれしく思っております。ありがとうございます。

○委員：滋賀子育てネットワークですけれども、お話が難しくなる前に発言をと思ひまして。

休校中の幼稚園、保育園、主に幼稚園がお休みの間に、「おうちミュージアム」に世話になりました。私どもも情報発信しておりますが、こういうサイトがあるから、ぜひ親子で見とね、親子で楽しんでねということで、発信をたくさんさせていただきました。また、在宅でお母さんなり、お父さんがいらっしゃって、親子で過ごす時間が多かった中で、こういう博物館という切り口で、身近な生き物であったり、琵琶湖のことを考えていただく機会にもなったのかなと思ひました。この「おうちミュージアム」が始まったのは本当に早かったので、とても助かりました。

それから、オープンのチラシのイラストですが、これは周りのママとか、お子さんにすごく人気があって、評判がよかったので、褒めるなということでしたけれども、あえて一言つけ加えさせていただきます。ありがとうございました。

○委員：何点かあります。1点目は、今発言していただきました遠藤さん、ありがとうございます。UD評価に関わらせてもらって、まさにストレッチャーに乗っている方の目で見ていただいて、貝塚がどんなふうに見えるかというのを後で見たいと思ひます。みんなで知恵を出し合いながら、作業をなさる方も、大きな鏡の角度を調整するために、「もうちょっと、もうちょっと角度を。いや、そうじゃなくて」と言いながら、とても苦労して設置したという流れがあります。

それで、貝塚がただ鏡に写って、ストレッチャーに乗っている方がその貝塚が見られても、それが貝塚というのが分からないだろうなど。よく知っている人は分かりますけれども、鏡に写ったときに結局、パーマ屋さんの時計のように、ちゃんとした文字になるようにしたらどうかとか、本当にいろいろ発想をしてくださって、でき上がったところなんです。

しかし、いいものができてよかった、よかったではなくて、交流員さんの事前の研修をたっぷりしてほしかったなと思ひています。わざわざ、これはストレッチャーに乗っている方のためにしましたと、そんなことは言わなくてもいいと思ひますけれども、ストレッチャーで来ても、こんな工夫をしてみた、楽しめますよというような、交流員さんからの言葉かけがあれば、もっとすてきな博物館になるだろうなと思ひています。

貝塚のところは入り口に龍の絵が鏡の裏に描いてあり、鏡と気づかないと思ひるので、その説明を受けて、ああ、ほんとだっていうふうに分かるような位置に立ってもらって、ちょっと声をかけてくださったらいいんじゃないかなと思ひて、声をかけさせてもらいました。交流員さんは何かちょっとヒントをお伝えすると、積極的によくしゃべっ

てくださる方がそろっていらっしゃると思うんです。私もお話しさせてもらったときに、すごく反応のいい方たちだなと思っていましたので、UDに関しても研修をしていれば、自然に声をかけてくださる人たちだと思います。やっぱりでき上がったものをどうやって来館者に伝えていくかというのは、またほかの場面で、琵琶湖博物館はあいうことをしていた、うちもこんなふうにしてみようかというような広がりにつながっていくと思いますので、そういうところを交流員さんに研修していただきたいと思いません。

それと、職員さんがすごく大変な思いをなさっているのは分かったんですけども、私も整理券で2時間ほど待って、草津の道の駅で時間をつぶして、もう一回来たときですが、守衛さんというか、ガードマンが2人ほどいて、時間の紙を配ってくださっていました。できれば、もうちょっと増員はできないのでしょうか。コロナ対策でやっているんで、その辺はもうちょっと強く言ってもいいのではないのでしょうか。職員さんが自分の仕事を置いてまで、紙を配るだけの仕事をしていいのかと思うので、そこはもうちょっと工夫ができたんじゃないか。いつもつながりのある大学生さんに助けてもらうとか、博物館に役に立つことならするよというような人に声をかけてやってもらうとか、何かできなかったのかなと思うところです。

もう一つは、危機管理の観点からなんですけれども、先ほど藤田さんと、UDって終わりに改善なので、今後もそういうふうにしていきますかと言ったら、なかなか難しいけれども、そういうふうにしたいですねという話をしていたんですけども、聞こえない方がもし館内で何か起きたときのために、パトライトをつけてくださったというふうに聞きました。UDではなくて、今まではなかったものがついたということは、とても喜ばしいことだなと思っています。私に来させてもらったときに、入り口の入ったところに「もしサポ滋賀」の案内が掲示されていたんです。コロナ対策のシステムですが、皆さん、ご存じですか。ところが、さんざん待たされてやっと入ったときに、それが置かれていても、QRコードをピッと読み込むのは、なかなかしないと思うんです。配った紙でもQRコードのことは知らせてありますと言われていましたが、何かもうちょっと、交流員さんを1人つけるとか、待っている間に、これをしていただけませんかというような声かけをしながら、「もしサポ滋賀」をしっかりしていくことが大事かなと思います。「もしサポ滋賀」を配置するのは琵琶湖博物館が第1号だったので、知事も一生懸命、「もしサポ滋賀」のことを言っているんですけど、なかなか県民が本当に、このQRコードを読み込むということをしてきているんだろうかと、いつも思っています。私も身近な人には言ってますし、館内の職員さんという立場ではないときも、そう

いうことをみんなに広めていく。琵琶湖博物館にも当然あるんだよ、来たら、これ読んでねということもちょっとずつ草の根で広げていかないと、なかなか広がっていかないと、その辺ももうちょっと工夫してほしいなと思います。

もう一つは、予約のことで。まずもって、電話やファクスの予約はできないですね。予約の方法の画面がPDFなんです。コロナの数を表す情報もPDFなんです。視覚障害の方にとったら、PDFって画像なんです。なので、ご自分では情報が全く読めないという中で、どうやって予約したり、キャンセルしたりできるのかというところがあるので、そこは何か改善してもらわないと、視覚障害の方が誰かを頼って予約してくれないかということになりますし、昨今の視覚障害の方はパソコンを使いきなせる方が多いので、ぜひともそこは改善していただきたいところです。もしそれができないのであれば、予約できる電話、ファクスを設置してほしいと思います。パソコンとかスマホを使えない高齢の方だとか、聞こえる聞こえないに関わらず、障害のあるなしに関わらず、いろいろな方法で誰もがアクセスしやすいということが大切だと思いますので、電話、ファクスも置いておいてほしいなと思います。以上です。すみません、長くなりました。

- 山西会長：4点ほど要望を出されていますが、事務局のほうは承って改善するというところでよろしいですか。この場で何かお答えできることがありましたら、どうぞ。
- 事務局：全部UD関係ですね。交流員のほうの教育をとということと、それから危機管理のところをもっと頑張ろうということと、それから予約の仕組みの改善を進めていきたいと思います。ありがとうございます。
- 委員：決して先程の意見に反対するわけではなくて、一般論なんです、協議会委員、これだけ人数がいますので、みんな勝手なことを言います。全部対応すると本当に大変なことになります。なので、協議会として、改善するという言質を取るのはやめたほうがいい。議事録に残りますから、この場では検討するとおっしゃるにとどめて、検討した上でしないことがあったっていいし、採用することがあったっていいというスタンスを自分たちに課すことは、協議会委員にとって重要だと思います。
- 委員：学校団体の利用のことについて、ちょっとお尋ねをしたいんですけども、今年は本当にイレギュラーな年ですので、単純に前年度との比較というわけにはいかないかなというふうに思うんですが、9月以降、受け入れを再開されているというお話でしたので、9月以降、大体、学校の利用が例年のような状況に戻りつつあるのかとか、そのあたりの情報があれば、教えていただけたらと思います。
- 事務局：実は学校団体の利用は、再開してから予約が結構多い状況で、ほかに行くところ

ろがなく、こちらに来るといふケースが結構あって、それで予約が多いというところもあります。ただ、利用してもらうに当たっては、3密とかそういったところは避けるために、例えば体験学習とかは人数が多い場合は、時間を2つに分けて利用してもらうなど、そういった感染防止対策をしながら、体験学習とか、学校団体の利用とかいうところを見学とかしていただいているような状況です。

(2) 新琵琶湖博物館創造基本計画行動計画

令和2年度取組状況について

○会長：そうしましたら、時間の関係もありますので、事務局からの報告のほう、次の議題についてお願いしたいと思います。

新琵琶湖博物館創造基本計画にかかる行動計画 令和2年度取組状況についてということをお願いします。

○事務局：行動計画の取組結果については、横長の資料2のほうにまとめさせていただいています。

1つは、コロナによるいろいろなイレギュラーがあったということと、それからまだ年度の間段階であるということがありますので、100%に達していないものが多い、あるいは今後の実施について、コロナの様子見というようなところが多いという状況になっております。そうした中で、リニューアルに関しては完成いたしましたし、グランドオープンいたしましたし、それに関連するところで、資料をうまく使うとか、そういったところはできてきたかなというふう考えております。

こういった中で、きょうはまだ持って来れませんでしたけど、展示が新しくなったのに合わせた学校向けの展示ガイドなどはほぼ完成という状態です。

この中でトピックとして、今回は、先ほど活動の中でも紹介させていただきましたけれども、「おうちミュージアム」の取組のところ、全体の行動計画のところでは、3ページ目、5番「広報・営業活動の強化」の「国内知名度の向上」の中にある「ウェブを利用した認知度と利用者利便性の向上」というところに当たりますけれども、このところに「おうちミュージアム」を当てはめております。この紹介をさせていただきたいと思います。

実は、琵琶湖博物館の情報システムに関しては、時代の要請に合わせて、この行動計画の前半のほうでは、仕組み全体を変えるというようなことをしてまいりました。ホームページをつくり変えるということをやってきて、現在のホームページというのは、来館する人向けの情報を出しているいわゆるランディングページ（着陸ページ）と言われ

るものです。そろそろもう一回、インターネットのよさを生かして、情報発信を始めようかなと思っていた矢先に、このコロナ禍が始まって閉鎖されてというところで、じっくり考える間もなく、おっとり刀ということではありましたが、いろいろ取組をしましたので、その辺のことを紹介させていただきたいと思います。

鈴木のほうからプレゼンいたしますので、よろしくお願いいたします。

○事務局：「おうちミュージアム」の制作のほうを担当させていただきました企画調整課の情報担当の鈴木と申します。よろしくお願いいたします。

今回、特に休館期間中に割と急造仕様ではありましたが、「おうちミュージアム」というのをつくりました。既にご利用いただいている委員の方もおられるということで、我々としては非常にありがたいのですが、どんな感じのものをつくりましたというのと、どういう経緯でできたかというところを説明させていただきます。

本日のメニューとしましては、まずどんな経緯でこの「おうちミュージアム」ができたか。続いて、「おうちミュージアム」にはこんなものがありますよというところ、それからこの後、「おうちミュージアム」というのは一体どうなっていくのかというところをお話ししたいと思います。

ということで、まずは、「おうちミュージアム」が何でもってできたのかというところからスタートします。

創造基本計画のほうにもありますとおり、琵琶湖博物館のホームページをより使いやすく、よりいろんな人に使ってもらえるようにということで、誰もが気軽にウェブ上で学べるようなコンテンツをつくっていいんじゃないかという話になりつつあったんですが、これを細かく詰める前に、そのすぐ下、赤で書いてありますけれども、コロナが始まってしまい、琵琶湖博物館も閉まってしましまして、滋賀県のほうから「コロナに負けないぞ！！子ども応援プロジェクト」を始めるよということで、琵琶湖博物館も休んでいる子どもたちのために、何か学習コンテンツを出せないかという話になりまして、まずは手持ちのものをつとにかく使えるものはどんどん使っていいよということで、BBCさんと一緒につくりました「webアミンチュ」の動画がありましたので、こういったものをまず提供しました。

県のホームページだけではなくて、我々もこのホームページの上で何かやらないといけないということで、あまり深くこねることはできませんでしたが、とにかくまずはホームページ上で何か出そうと。それで、ネーミングはどうしようかなというのもありまして、琵琶湖博物館のウェブミュージアムみたいなものでいいのではないかという話もありましたが、先ほど芳賀のほうからも話がありましたとおり、北海道博物館さんのほ

うから、「おうちミュージアムをやるんだけども、一緒にやらないか」とお声がけいただきましたので、「おうちミュージアム」という名前でスタートさせてもらいました。

ちょうど、この「おうちミュージアム」のコンセプトも、「子どもたちが家で楽しく学べる」というところでしたので、まさにちょうどいいのではないかと。当時、我々が参加した時点で、全国で30館ほど参加していきまして、現在ではこれが44都道府県にまで広がって、217館参加している状態です。

このWebコンテンツ、どんなものをつくったかということですが、皆さんのほうに、ミジンコの絵の描いた資料というのがあるかと思います。

まずコンテンツですが、最初はステイホームということで、家から出るなというお話でしたので、家の中でできるものを見せましょうよということで、そのミジンコの絵、実はこのすぐ後に出てきますが、ちぎり絵の台紙になっております。家に届いたチラシなんかをちぎって、ミジンコを完成させようというものです。

その後、ステイホームタウンへと移行しました。琵琶湖博物館の展示、水族から出ていったところに、「さあ、ほんものの琵琶湖（フィールド）へ出かけよう！」という声かけもあるとおり、フィールドを見てほしいよと。ホームタウンですので、身近なところで観察をしようよということで、2枚目のところ、鳥のビンゴが載っているかと思えます。身近なところで鳥を探して、ビンゴを完成させてみようといったような、フィールド系のものというのも、徐々に追加されました。

実際、どんなものがあるかなというところの紹介になりますが、「プランクトンちぎり絵」これはホームページに載っている実際の例です。こんな感じで作ります。

ほかにも、工作系のももあります。これは、「とぶタネをとばそう」というので、付箋を2枚貼りつけて、木の上のほうからくるくる回りながら降ってくるタネがあるんですが、単純につくって落として遊んでもらってもいいですし、実際のタネを見つけてきて、そのタネとの違いを探してもらったりというように、深掘りしようと思えば、さらに深掘りもできる、そういったものです。

フィールド系のもになってきますと、例えばほかの博物館と協力して何か出そうよということで、これは兵庫県の人と自然の博物館と協力しまして、「カエルの鳴き声を聞き分けてみよう！」というものです。博物館の近くも結構田んぼがありますので、夕方とか歩いていると、ゲコゲコと声が聞こえます。実際、カエルの研究者の方というのは、こういう音声を取って、それが今まで聞いたことのないカエルの声だと、そこから新種を発見なんていう、そんな話もあったりするぐらい、カエルの声というのはしっかり聞き分けています。先ほど資料のほうにも入れましたとおり、「とり d e ビン

ゴ」とか、「足跡 de ビンゴ」といったように、フィールドを探索してもらったものも出しております。

家にずっといる際に、何かBGM的にボーっと見ていられるようなコンテンツもあったほうがいいんじゃないかなということで、「生きもの動画シリーズ」として、1時間ほど延々とトンネル水槽の映像が流れるとか、1分程度、ずっとボルボックスが回っていると、そういうものがあります。

ちょっと一回ここで表に戻ります。これはアメーバの捕食の動画ですが、こんなふうには中身がずるずると動いてきて、アメーバはどうやって捕まえるのかなと言われても、あまり知らない人が多いと思うんですが、このように餌が入りたくなるような隙間をつくって、閉じ込めて食べてしまうという、そんなものが見えます。ちょっと上側を見てみると、どんな仕組みなのかなというのは、学芸員がここで解説をしているというように、長々としたこういう解説を読んでもらってもいいですし、「何かよく分からないものが動いて、何か食つとるわ」という、それだけを楽しんでもらってもいいでしょうというように、とにかくマニアックなものから、BGM的にずっと使えるものまで、いろいろと出しております。

いろんな方につくってもらっていますが、交流員によるコンテンツ制作というの、休館中にはいろいろつくってもらいまして、これは資料3につけたものです。交流員さんの中でも、特にこういったコンテンツづくりのうまい方がいまして、その方がつくってくれたものですが、これは学芸員がちゃんと監修をしています。これはNHKの「ニュース630」で紹介されて、スタジオでもぱたぱたと飛んでいる様子が写されたという、そんなコウモリクラフトがあつたりします。

それで、いろいろとコンテンツを出しましたが、実際に使われたのかといいますと、休館中、「おうちミュージアム」のところに来てくれた方ですが、3月17日～5月31日まで、その間にどれだけの人が見たかということで、2万6,000ビューほど見てもらっています。これは増え方がちょっと面白いところがありまして、テレビで紹介されると、ところどころポンポンポンと跳ねていますけれども、例えば、「ニュース630」で紹介されると、6時半から7時にかけてのアクセスがポーンと上がるといったような、面白い上がり方をします。

地域的に見ても、滋賀の人がたくさん見てくれていますが、来館する方というのは大阪の方とかも多いので、大阪も見えてくれています。意外だったのは、東京の方も割と見てくれています。ということで、関東のほうでもちらほらと琵琶湖博物館を気にしてくれる方がいるんだなというところも、「おうちミュージアム」のところから分かってき

ました。

学校なんかでも、藤尾小学校のホームページですけれども、「学習に役立つリンク集」という形で、琵琶湖博物館の「おうちミュージアム」を載せてくれています。小学校のほうでも学習に役立ててくれているということです。

それで、最後の話題になりますが、「おうちミュージアム」は基本的には、琵琶湖博物館が閉館している際に外の方に学んでいただくというコンセプトで、最初スタートしました。そういうことで、6月オープン以降、残念ながら、ちょっと見に来てくださる方が減っているという状態になっております。グランドオープンのタイミングで琵琶湖博物館のウェブページ全体で見ると、ポンと跳ねていますが、残念ながら、このタイミングで「おうちミュージアム」というのは、あまり跳ねておりません。

そういうことで、何が必要になってくるかといいますと、これまでのコンテンツというのは、基本的にはウェブ上プラス自宅で完結するものでした。今後、この「おうちミュージアム」をおうちには収まり切らないような、もっと博物館の展示を見るのに役立つもの、展示がもっと面白くなるといった方向性でつくっていかなくてはいけないのかなという感じで、今後、どんどん改善していこうと考えております。

かけ足になりましたけれども、以上です。

○会長：鈴木さん、どうもありがとうございました。

行動計画については、「おうちミュージアム」のところをピックアップして報告していただきました。

それでは、引き続き、皆さんのほうからご意見を承りたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

○委員：資料を見せていただいて、琵琶湖博物館のユーチューブチャンネルをユーチューブ上で検索してみたんですけど、一番上に出てこないんですね、琵琶湖博物館のユーチューブのアカウントが。そのアクセス数がもう少し向上するために、更新した際とかに、フェイスブックやインスタグラム、ツイッターなどでそのリンクをシェアしていったら、もっとアクセス数が増えるんじゃないかなと思ひまして、提案させていただきます。

○会長：ありがとうございます。今のはツイッターのリンクですね。

○委員：ユーチューブですね。ユーチューブのリンクを各SNSに貼ることで、アクセス数が向上すると思います。

○会長：事務局、いかがですか。

○事務局：ご意見ありがとうございます。そういうふうなリンクを貼ったりとかというのが

できたらなと思っているところでしたので、参考にさせていただきます。ありがとうございます。

○会長：ほかにいかがでしょうか。

○委員：私も保育園と小学生の娘がおりまして、母という立場でもいろいろ利用させていただいているので、気づいたところをちょっとお話しさせていただきたいと思います。

「おうちミュージアム」は、実は我が家も休校中に拝見したのですが、「おうちミュージアム」になる前なのか、本当に先駆けのときに、動物の耳はどんな形か描いてみようとか、尻尾はどんなのみたいなどころを見ました。子どもは、リアルな感じにびっくりしてしまいましたようです。キャラクター的にして、デフォルメし過ぎるとよくないかもしれませんが、なるほど、小さい子どもにとったらそうなのかなと感じました。実際に家の中にずっといたので、プリンターの使用量が半端じゃなかったのも、動物の耳と尻尾を描くだけにA4の紙1枚出すのがもったいなくて、あっ、このサイトやめようかなって思ってしまったところがありました。コンテンツが1枚でも、この動物、昆虫というのがいろいろあると、プリントアウトして、10分ぐらい描いてもらえたら、24時間ずっと子どもという時間が稼げます。せっかく1枚出したのに、3秒ぐらいで終わってしまったら、残念に思います。あっ、もうこのサイトはやめておこうと思ってしまったところがありました。それ以降、こんなにコンテンツが増えていたことを存じ上げなくて、もしかしたら、せっかくテレビとかで紹介されていても、リピートのアクセス数がどれぐらいあるのかなというのがちょっと気になったところでした。

あと、UDのところ、障害者の方にとってはすごく見やすく、工夫されたというところがあったのですが、実際に私も、子ども2人を連れて、ベビーカーと小さい子を連れてきたときは、結構大変でした。水族展示のところが好きで、アザラシは絶対見たいけど、そこに行くまでの過程が長過ぎて、すごく時間がかかります。でも、その過程も全部、お魚を見たい、また、下部が壁で、上のほうにあるお魚は子どもの身長では見えず、小さい水槽の魚も全部見たいというので、一回一回だっこして見せて、下ろしてするのが現状です。

どの年齢の子から対象にするかにもよりますが、育休、産休のときに来ているママたちもすごく多くて、小さい子の全部触りたい、見たいというのに対応するのに、もうへとへとになってしまって、滞在時間3.5時間というお話もありましたが、やっぱり魅力がたっぷり詰まっているので、私も、上のほかの展示も見たいけど、子どもたちは2回来ても、3回来ても、絶対にお魚をまず見に行きます。だから、だんだん時間が延びていってしまって、なかなか上の展示を見に行けない。とりあえずアザラシを見に行きた

いけど、順路でずっと回っていくから、時間が増えていくというのが実情です。子ども連れの感想で申し訳ないですが、すごく楽しんで拝見させていただいています。

○委員：この行動計画表についてなんですけども、今回初めて参加ということもあって、すごいしっかりした行動計画表だなと思って、非常に感心しました。右手のほうにある達成度の評価基準というのは何かお持ちだと思うんですけど、差し障りのない範囲で、簡単に結構ですので、教えていただけるとありがたいなと思っています。

○事務局：達成基準は、今書いてあります③達成度（上半期）というのは、上半期はここまでいこうと思ってやっていたけれども、どれぐらいできたかという自己評価ということになります。なので、もともと予定していたもの、例えば1ページ目で言いますと、2の一番下のところから2番目、「教員用ガイドツールの作成」で、「試作ガイド作成に向けての情報収集」ということで、これは材料を整えるところまでは100%できたので、後半の課題がそれを実際につくって、渡して試してもらうんですけども、これが後半の仕事で、これができると、年間としては何%できたかなという形で評価をするという形になります。

○会長：今の回答でよろしいでしょうか。

○委員：分かりましたが、本当はいろんな評価基準というのを、その達成度合いで計っているということですね。大体分かりましたけれども、もっと厳密ないろんな細かいものがあるのかなと思ったんです。

○事務局：例えば、人を何人集めるとか、そういう形での評価基準というのはなくて、業務の遂行の達成度でこれはやっています。

○委員：分かりました。

○会長：ですから、いわゆる評価じゃなくて、予定どおり、どこまで進んだかという、それだけのものです。非常にプリミティブな資料ということです。

○委員：「おうちミュージアム」のことなんですけれども、年稿博物館でもウェブにコンテンツをどこまで出すかというのは、実はいつも悩んでいまして、やり過ぎると、もう行かなくていいじゃないかというふうになっても困るみたいなどころがありまして、僕たちも話し合ったんですけど、博物館の存在意義の根幹って、そこに行かないと見ることのできない本物があることだと思うんですよ。だから、コロナの間をどう切り抜けるかという戦略はすばらしいと思うんですけど、今、予約制で来館することができるようになってるので、ページビューが伸びなくても、別に気にしなくていいんじゃないですか。

- 事務局：今のお話ですが、これは実は、後の第三次中長期計画のところにもつながってきますが、むしろやったほうがいいかなという感じでおります。大相撲をテレビでやったら、来なくなるだろうと言っていたけど、やはり相撲人気が増したというのもありますので、そういったことができるんじゃないかなということを考えております。
- 館長：私からも一言申し上げますが、琵琶湖博物館の場合はやっぱり、博物館に来て、いろんなことを知ってもらうのももちろんなんですけど、その先の地域の面白さ、琵琶湖の面白さ、そういったことを知ってほしいというところが根本にあるんですね。ですから、そのための方法として、展示でいろいろ面白がっていただくという方法もありますし、そのほかにもやはり、こういうウェブを使ったりとか、講演をしたりとか、いろんな方法で伝えるということがあると思います。この方法もこれから非常に有効になる方法だと思いますので、できれば、こういう方法でもやっていきたいなと、今思っております。
- 委員：すみません、僕、曖昧な言い方をしました。おっしゃるとおりで、魅力を伝えるとか、フォローアップの学習とか、いろんな扱い方があると思うんです。ただ、ページビューを気にし始めると、すごくしんどくなるので、そこはあまり重視しなくていいかなと思っただけです。
- 委員：先ほどお話のあった達成度のところを拝見して、イベント系とか、コロナの影響を受けて達成度が低いところはどうしょうがないかと思うんですけども、コロナの影響がさほどなさそうなところで達成度が低いところは、どういう背景があるかなというあたりを少し伺えたらと思います。表で見ますと、最後のほうになりますが、「博物館学の追求」というあたり、「共同研究」のあたりが30%というところと、表の最後の項目になりますが、「刊行物による発信」のところは25%というふうに、達成度が上半期低くなっているあたりの背景を伺えたらと思います。お願いいたします。
- 事務局：ご指摘ありがとうございます。「博物館学の共同研究」は、琵琶湖博物館の組織で言いますと、博物館学領域の学芸員が中心となって、何か共同研究ができないかということで検討しております。もちろん、それに限らず、いろんな学芸員も博物館学的な研究を行っているんですけども、それぞれの学芸員が興味を持っている研究内容というのがそれぞれありますので、個々の研究内容については進めていったら面白いんじゃないかというものが出てきてはいるものの、なかなかそれを全部まとめて共同研究という形にするには、少し難しいかなというような議論の結果となってきています。ここでは目標として、「共同研究の可能性を探って開始する」となっていますけれども、個別の研究を進めていきながら、そこから発展して、先々広げていくような形で今はやっ

ていきたいと思っています。なので、当初目標としていたところから、若干方向をずらしながら、研究を進めて、成果を出せる方向に向かっていくことでは、達成できるようにと考えています。

「出版物」につきましては、ブックレットについては順調に刊行しているんですけども、今年度の目標は「子ども向けの読み物を検討」となっておりまして、ちょっとそこについては、なかなか取り組めていない部分があったので、評価が低くなっています。なので、また後半できる形で、いろいろな方向性で出版物を検討していきたいと思っています。いろいろご指摘ありがとうございます。

○委員：琵琶湖博物館はこれまでも魅力的な共同研究をたくさんされていたことが、展示などのベースにもなっているかと思しますので、個人研究はいろいろ面白いことをされているかと思しますので、それがまた次の共同研究の芽になっていくことをこれからも拝見していきたいと思えます。お願いします。

○会長：ありがとうございます。

(3) 第三次中長期計画について

○会長：それでは、最後の議題ですけれども、「第三次中長期計画について」、事務局からご説明をいただけますでしょうか。

○事務局：再び事務局からご説明させていただきます。

ただいまご議論いただきましたのが、新琵琶湖博物館創造基本計画の行動計画ということで、これは第二次計画に相当するものでありました。こうやって計画をつくって、それぞれ発展的にやっていくということをやってきたわけですが、この計画自体が今年度で終了いたします。そのこともありますので、現在、次の10年間に向けた第三次中長期計画というのを策定する準備を進めているところです。

今日は、こちらのほうにお配りしていますが、素案という形でまとめてありますので、これについて皆さんのご意見とか、ご感想を伺いたいと考えています。

第三次の計画の前提としまして、資料3ですが、これまでの発展の経緯を申し上げます。

まず、琵琶湖博物館の使命・基本的な考え方というのがあります。

この博物館は「湖と人間」というのがテーマでありまして、その共存について皆さんが考えると。そのためのいろいろな情報や機会を提供するということです。私たちが皆さんと一緒に研究をしながら、たくさん価値を発見していこうということをしております。

行動する主体はそれぞれの人々、活動するのは現場、博物館は入り口であると。それから、人々が交流する博物館になろうというのが基本理念として掲げられております。

これまで2つ、中長期基本計画を行ってきたんですけども、1つ目の第一次中長期基本計画のタイトルが「地域だれでも・どこでも博物館」ということでして、これは先ほど言いましたように、主役は地域の皆さんであるということで、その人々が自分たちの住んでいるところ、あるいは身の回りで活動ができる、それを応援できるような博物館になっていこうというのを目指しておりました。

2つ目の第二次中長期基本計画に当たる新琵琶湖博物館創造基本計画では、「博物館の『木』から地域の『森』へ」ということで、20年たって古くなった博物館の展示を大幅に刷新するというのと並行しまして、今まで博物館があつて、そこから博物館の木というイメージ図があつて、そこからいろんな人が果実を受け取つてというものだったんですけども、今、いろんなところで人々が活動を広げております。そういった人々をつないで、博物館一本の木ではなくて、地域としての森になっていこうということを目指すということをやりました。

そういったことを踏まえて、じゃ、リニューアルが完成した現時点で、今後の10年を考えていくときに、我々は何をしていったらいいだろうかということで考えております。

新しい計画の方向性、素案のほうを一言でまとめてしまうと、そこに書いてある3つになります。

世界の琵琶湖になろう。今まで琵琶湖の価値とか魅力を発信してきたわけなんですけれども、残念ながら、まだ琵琶湖というのは、日本で一番大きいという以上のレベルでは、なかなか認知されていないというところがあるんですけども、琵琶湖の本当の価値はもっと古くから、世界有数の古代湖であり、それとともに歩んできた文化があり、その希少さというのを理解した上で、よりよい共存、これが末永く続いていくにはどうしたらいいかということを考えることにあります。こういったことがまだ世の中に十分伝わっていないということで、それをもっと力強く発信していこうというのを考えております。その場合に、日本だけではなくて、世界を視野に入れて発信していこうということになります。

そういったことがある一方で、世界を相手にすると言いながら、また別のところで、今度は湖との共存というのを考えていく行動というのは、人々の日常の中で行われることであります。その日常の中において、琵琶湖博物館というのがいつでも気軽に使える施設でありたいということを考えています。

それから、そういったことでいろいろ活動する人たちが集まって、情報を交換し合って、互いを刺激し合って、活動が継続していくような仕組みづくりの場になりたいということを考えるということになります。

こういったことを考えておりました、素案というのができております。

今後のスケジュールですが、きょうは素案についてご議論をいただいて、ご意見をいただきたいというところと、もう少ししますと、県議会のほうに出させていただきます、またご意見を伺うというような形になります。2月頃に、もう一回、この博物館協議会を開けると思うんですが、そちらのほうでご意見を伺いたいというところと、3月には計画を決めたいというふうに考えております。

それで、素案のほうにつきましては、あらかじめお配りしておりますので、お読みいただいているんじゃないかなと思いますので、説明を長々とすることはないんですけども、特徴としては、7ページ目の中長期基本計画の体系のところになります。

まず、「使命」と「基本理念」というのはゆるがせにできないものでありますので、これを維持していく。そういった中で、この7ページまでのところに、社会情勢と博物館が抱える課題というのを書いていますが、それによって10年後、琵琶湖博物館が十分貢献できるとしたら、こんなふうな社会になっているんじゃないかというのを想定する。それに対して6つの事業目標というのを作りまして、こういうことをやっていきますという方向性を示しております。それを達成するために、じゃ、何をやるかということで、重点事業というのを設定しているという構成になっております。

ただ、この中長期計画は、現時点で10年後ということで立てておりますけれども、世の中の動きというのが非常に流動的でありますので、中間段階の5年目で全体を、これで本当にいいのかということを見直しつつ、進めていこうというふうに考えております。

説明については、全部やってしまうと長くなりますので、ここで皆さんに忌憚なく質問していただいて、それにお答えする形で、また随時、説明をさせていただこうかと思っております。よろしく願いいたします。

○会長：新しい基本計画をこれからつくろうという大事な時期に差しかかっていると思います。きょう、ご質問、ご意見を出していただきますが、さらにもう一度、また2月頃にこの協議会を開催して、もう一度議論する機会も与えられているということですが、それでもって県議会にかけられて、これが決まりまして、来年度からはそれにのっかって2030年までやっていくという、そういう大事な計画ですので、ぜひ皆さんのほうからご意見をいただきたいと思っております。

今日のところは、資料3の一番後ろについている色刷りの横位置の「第三次中長期基本計画（素案） 概要版」というのが要領よくまとめられていますので、そういったところを見ていただきながら、大きな「使命」とか「基本理念」、そこから導き出される「事業目標」がこれでいいかどうか、大事なところで抜け落ちがないだろうか、どうだろうか、気づきの点があったら、ぜひ出していただきたいと思ひますし、また文言の中で、これはどういう意味なのか、ちょっとよく分からないというところがあれば、ご質問をしていただければというふうに思ひております。

○委員：まず資料3で、「第三次中長期計画の策定について」という資料をおつけいただいておりますが、その3番のところ、これは恐らく当たり前だから、省かれたのかとは思ひますけれども、新しい計画の方向性ということで3つ挙げられておりますけれども、やはり遠慮せずに、「さらなる湖沼及びその文化の研究体制の充実」というのをに入れておけばいいと思ひますね。

それは、人と物と予算の獲得を目指すというようなことをはっきりとうたったほうがいいかと思ひます。それ以外の3つのところは、どちらかというに入館者、利用者側に立った博物館像を目指していくというところ、取られそうですので、ある意味で県庁に向かって、これらをするに当たっては、研究体制の充実は必須ですよということを計画の中に入れておかれたらどうかというふうに思ひます。

琵琶湖博物館は湖と人との関わりを総合的に研究するために建てられた博物館だと思ひますので、それをさらに充実してやっていくんだと。おそらく今は、湖沼研究では世界のレベルになっていると思ひますけど、今後もリードしていくんだというようなことをスローガンとして挙げられたらいかかと思ひます。

○会長：ありがとうございます。

○委員：最初のほうで、協議会委員の言うことを聞かない可能性もあると言ったことを、今、後悔しています。強く賛成しますね。やっぱり看板のところ、研究をして、新たな価値を自分たちが作り出し、それを発信するという、研究型の博物館であるんだということが高々と掲げられていることがすごく必要だと思ひます。そうじゃないと、長い目で見るとスタッフが疲弊し、その空気が博物館ににじみ、魅力のないものになってしまうと思ひるので、なるべく研究スタッフの方が伸び伸びできるような看板を掲げる、そこは譲ってはいけないんじゃないかなと私も思ひます。援護射撃です。

○事務局：ありがとうございます。

実は、新しい計画の方向性というところを、皆さんに分かりやすいように説明するところで、少し丸めてしまった部分があるんですけども、事業目標のところを見

ていただくと、事業目標1というのが、これまで以上に研究をしていきましょう、これまで以上に研究を進めていきましょうというだけでなく、今まで論文とかだけでしか出していなかったのを、もっと大々的に世界中に向かって発信していこうということで、今、土井先生、あるいは中川先生がおっしゃった、さらなる研究の充実というのは、実は事業目標1のところに込めております。

それから、もう一つ、事業目標2のところで、同時に研究とかで重要な位置を占める資料に関してもっと大事にして、それからいろんな人が使えるように発信できるように整備したいというところを、事業目標2ということで挙げさせていただいています。

これを丸めて、分かりやすいようにということで、「世界の琵琶湖になろう」というふうに言ってしまったので、そういうふうにとられてしまうんですけども、大体、琵琶湖というのがこんなに価値のあるものだということを世界に向かって言うためには、我々がとにかく地域の人たちと一緒に琵琶湖の価値を見つけて、どうや、どうやと言っていかなければいけないんだということは考えております。

○委員：「世界の琵琶湖になろうって、一体どうやってなるねん。来館者増やすちゅうことやろう」と言う議員とかがいるわけです。なので、目に見えるところに研究と出してしまえという土井委員の意見に、私は個人的には賛成です。

○委員：今、事業目標2のところで、資料の管理体制も強化するという話が出てきましたが、10ページの重点事業2-1のところで、今、研究の重要性という話がありましたが、それをさらに支えているのが資料になるかと思えますので、管理体制の強化というあたり、もう少しお伺いしたいと思いますが、ここに「研究の進展によって生じた新たな標本分野への対応を進めます」ということが書いてありますが、開館されてから、いろいろ資料が蓄積して、増えてきたものに対応するということかと思えますが、具体的にどういう分野が増えてきているかということと、あと収蔵庫のほうも、うちの博物館も収蔵庫がいっぱいになってきて、どうしようという話が日常的に問題になっているんですが、琵琶湖博物館のほうでは面積を増やすとか、何か整理してスペースをつくるのか、どういうふうに対応されているか、そのあたりをお伺いしたいと思います。

○事務局：ご意見ありがとうございます。

琵琶湖博物館はオープンしてから24年ぐらいたちまして、収蔵品も130万点近く増えてきております。そのうちの登録が半分ぐらいというようところで収まっているというところがあるんですけども、資料自体はやはり学芸員が研究をしながら、あるいは学芸員の分野のところが中心に標本が増えてきているというところがあります。そういったものは、この先ずっと10年、20年というスパンで、いろんな学芸員の分野が変わり

ながらも、コレクションが増えていくというような、そういう長いスパンでの見通しをしているというところが1つあります。

それと、とは言いながらも、先ほど言ったように、標本数は増えているけれども、それを収める場所、スペースがあるのかというところなんです。もう既にいっぱいになっている収蔵庫もございます。実際のところ、これまでリニューアルにより、展示で皆様にお伝えしたいことを中心に予算を立ててやってきておりますけれども、それに反して、資料の扱いについては後でもできるかなという感じで、ちょっと置き去りにしてきたという経緯もございます。実際のところ、棚が少ないとか、そういった資料の整理をしていく人員が確保できないとか、いろいろな予算上の都合もあり、少しずつでもコンスタントに進めていこうという形でやってきたところなんです。

今度の第三次の計画の中では、やはり資料ももう一度見直しながら、資料の環境自体もよくしながら、永久的に価値のある資料をお預かりして、活用していこうとしているところではございますけれども、なかなかすぐに全部改善することはできないので、できるところからやっていくという、そういうスタンスでやってきております。

○事務局：もう一つは、これは研究の進展によって生じたというか、従来の標本とか資料の収蔵だけではなくて、これから発信とかいうところまで含めると、2次データとか、3次データのところが非常に強くなってくるので、そちらの対応も進めなければいけないという部分があります。

それ以外に例えば、従来は標本ではなかった分野、例えばDNAであるとか、そういったところは どうしていくのかというところも、今後は考えていきたいなというふうに考えております。

○委員：度々すみません。この事業目標の3、4、5あたりに関係するかなと思うんですけども、実は私も、滋賀県で生まれ育ったわけではございません。先ほども言いましたように、移住者です。滋賀県って多分、京阪神からの距離も含めて、移住者の方、もともと滋賀ではないという方が非常に多いかなと思っております。

そういう方々への視点ということで、例えばうちの息子、娘たちは20代ですが、この世代ぐらいの人たちと、この博物館の接点ということを考えてときに、非常に難しい。私も幾つか自分の興味のある話はしても、なかなか子どもたちは乗ってこないとか、恐らく世代で言うと、高校生以上ぐらいから、なかなかこの接点づくりというのは難しいものがあるのかなとは感じているんですけども、移住者の人たち、うちの息子たちも、琵琶湖を楽しむという観点は実は持っています。それは1つにはマリンスポーツであったり、いろんな形で琵琶湖を楽しむという観点は若者たちも持っているんですけど

も、そこに何かひもづけながら、琵琶湖を楽しみながらも、そこで何か生物と出会ったりとか、琵琶湖のそれこそ水質の問題とか、そういうところから何か接点がつくれていくような気がしているんです。そういうアプローチを見つけられると、若い世代の人たちがこの博物館との接点が何かつくれるのではないかなということはずっと考えていて、今、館内を見せてもらってもそうですけども、特に事業目標5の、より多くの人が利用する博物館と言ったときに、少し今までのターゲット層とはまた違うところの接点づくりというか、その辺を今後の計画にはぜひ盛り込んでいただきたいなと思っています。意見です。

- 委員：事業目標3のところ、企業などとの連携というところも入れていただいている、日頃からお世話になっております。企業の研修で来させてもらったりというのがきっかけで、来られた方が、次はご家族の方と来るとか、お友達と来るというふうにつながっていると感じています。

展示のところも、団体や企業のところも展示させていただける機会が増えてきたので、今後もそういうところで周りの方、子どもさんなども勉強で来られるときに見ただけだと、すごくうれしいなと思いました。

あとは、今、遠藤さんがおっしゃったみたいに、新たな接点というところで、日頃、いろいろ学芸員さんのお話をお聞きしていると、やっぱりめちゃくちゃ専門で面白いです。ただ、一般の方々が来られての接点というのは、時間を区切ってされていて、今はコロナで難しいかもしれないけれども、例えば、お魚も「僕が捕まえてきて、こういう研究があって、学術名が2つに分かれて、今年、発見されたんだよ」みたいなお話を聞くだけでも、やっぱり魚の見方ってすごく変わるので、本当に博物館の方が実際にされているんだというのを目の当たりにすると、また見方が変わって面白いし、今は水槽の中で見ているけれども、それがフィールドワークになるのか、一緒に琵琶湖に見に行ってみようとなると、こうやってお魚を研究されているのだと伝えられ、次の研究者を育てられ、さらに深く興味を持っていただけるきっかけにもなるのかなと思いました。

- 委員：今回から初めて参加させていただきますので、皆様のご意見を聞いていたんですけども、先ほどの話や今回の話や、また感想とか、いろいろ話してしまうかもしれないんですけども、よろしくお願いします。

私、西の湖でヨシ刈りのフィールドワークをしていて、コクヨさんにも参加していただいていた、あと長浜の北のほうの西浅井に山門水源の森というのがありますが、「山門水源の森を次の世代に引き継ぐ会」ということで、湿原の保全などを行っています。また、「うみのこ」や環境学習船に乗って、琵琶湖の水質とかを子どもたちに教

えたり、どちらかという、カーボンシンクで来ているんですけども、自然環境学習のフィールドワークで出ていることが多いんです。室内の展示のところで、山門水源の森が湿原ということで、その展示に少し協力させてもらっているんですけど、私も、「樹冠トレイル」のほうで、「琵琶湖で森を感じよう」というイベントをしたこととがあります。

今、琵琶湖博物館の魅力をどういふふうで発信するか、琵琶湖博物館のことをどういふふうにしていくかというお話があったんですけども、博物館がすごいというのは、もちろん滋賀県の者なので、よく分かっているんですけど、博物館というのは珍しいものを見に行くところ、またここにしかないものというのもあるんですけども、それだけじゃなくて、先ほどありましたステイホームからステイホームタウンへということで、例えば琵琶湖博物館で見るものが、自分の町にどういふふうにつながっているか。琵琶湖博物館で学ぶのもそうなんですけど、ここだけではなくて、滋賀県と琵琶湖の魅力がぎゅっと詰まったのが琵琶湖博物館なので、例えば展示の昔の家とかも、昔の家なんだった、小学生が言ったりするんですけど、まだ私の近所に行ったら、富江家と同じような家があるんですね。だから、どれだけ昔のことやねんって、子どもたちの話を聞いたら思うんですけど、大人は、富江家はここにあるけど、実際は自分の近くにもあるというのが分かっていて、ここを見たら、自分のところにもつながっているんだという、そういうつながりを見てもらえたらいいなといつも思っていて、ここで見たり、思ったことはここだけじゃなくて、自分の身近にもある自然だということです。「博物館の『木』から地域の『森』へ」というのも、ここで見た木は、自分の里山に行ったり、山のほうに行ったらあるんだということを知ってほしい。そして、そこに足を運んでほしいなと思います。

この展示の部屋で1か月ぐらい展示をさせてもらったことがあるんですけど、そのときお願いして、琵琶湖博物館に来られた来館者にアンケートを取らせてもらったんですけども、「ここはきれいだから来るけど、森に行ったら、虫がいる」とか書いてあるんですね。そりゃ、そうやろうと。それから、暗い森はどのぐらい暗い森のイメージかというアンケートを取ったんですけど、結構明るい森が暗い森なんですね、一般の人にしてみたら。それをちょっと変えてもらうような発信がここにあって、ここだけに来るんじゃなくて、あっ、そうか、じゃ、外に出てみよう。ここから次につながるということがその人に残るような、そういうことになったらいいなと思います。無理なことを言っているのは十分分かっているんですけど、そういうことを前から思っていました。

フィールドワークをしたときに、先ほどおっしゃったように、学芸員の人に話しても

らったら、私が話すよりも、みんながきらきらしていくので、ああ、学芸員の人に来てほしいと思うんですけど、学芸員の方はやっぱり研究が忙しいから、なかなか出られないと言われると、そりゃ、そうやと思うんですけど、来てもらったら、どんなにか楽しいだろうなというのも複雑に思ったりとか、いろんなことをしていると、いろいろ欲張って思ってしまう。重点事業とかいうことにはつながっていないかもしれないんですけども、そういうこととかを思っていました。

それから、ILEC（国際湖沼環境委員会）との関係というのはどういうものなのかなということの前から思っていたんですけど、それを教えていただけたら、ありがたいです。

○事務局：ありがとうございます。

この博物館は、最初に高橋も言いましたが、博物館に来て、一通り見て終わりではなくて、ここを見たら外に行きたくなって、外で何か見つけたら、ここで確かめたくなくてという形で、日常的に使われる博物館になりたいというのが次の10年の計画です。

例えば、「おとなのディスカバリー」とかで標本が扱えるとか、そういったところも、そういうことを念頭に置いてつくっていますし、今、C展示室をはじめとして、全部の展示室に地域の人たちのコーナーがあるのも、そういったことにつながっています。

例えば、事業目標3について、実は追加でお配りした資料が1つありますが、昨年度の前半の博物館でやっている行事の一覧、前にこの協議会に参加されていた方はご覧になったことがあります。活動を報告するときに、何が何件という形で報告すると、ちっとも内容が分からないので、全部一覧表にして並べたらどうなるんだということをやって配らせていただいていた。

追加資料（参考資料「令和元年度上半期の取り組み」）ですね。これは上半期だけで、いろんなものを全部入れています。実はコロナでない年は、半年間で150件ぐらい、年間で言うと300件ぐらいあります。これに「はしかけ」の行事まで含めると、大体年間600件ぐらいこなしているという状況があります。そうすると、研究も忙しいが、こっちもものすごく忙しいというのがあって、これは自分たちだけではやり切れませんが、「地域だれでも・どこでも博物館」とか、「博物館の『木』から地域の『森』へ」で培ってきた中で、皆さんとの協力関係があるので、そしたら琵琶湖博物館を舞台に、私たちも含めて、いろんな人がそういう情報発信をしていくことで、より力が出るんじゃないかなということを考えて設けているのが事業目標3のところになります。

先ほど、暗い森のお話がありましたけれども、例えば、森を一番知る人が、「森はね」っていうのをやってもいいなというふうに思いますし、そういう形でいろいろ協力しながらやっていくと、2人でやったら2倍じゃなくて、2乗だというのがありますが、そういう形でフィールドへの誘いというのがもっと強化できたらなというのが、事業目標3の意図になっております。ありがとうございます。

それから、ILECとの関係については亀田から申し上げます。

○事務局：ILECとの関係ということなんですけれども、何か具体的にこれというのは、すぐには出てきませんが、ILECでは、JICAなどで海外の研修生の方を受け入れられていまして、そういった研修の中で、当館を見学していただいたりとか、依頼があった場合はこちらで対応可能な講演とか体験とか、受け入れたりと関係があります。そういった形で個別の研修に対しては対応しているという形になっております。

○事務局：先ほどお話があった、呼んでもなかなか学芸員に来ていただけないところの補足としまして、地域連携のリストにも書いておりますが、一般団体とかからの依頼があれば、講師として行かせていただいております。

○会長：ありがとうございます。

時間もそろそろ迫ってきておりますが、どなたかご意見のある方はどうぞ。

○委員：「第三次中長期基本計画（素案） 概要版」の青色のところですが、「（仮）湖と共に生きる暮らしの中に、いつもある博物館」というキャッチですけども、これだけ拝見しても、実はこれまでとあまり代わり映えしないなという感じがするので、何かアトラクティブなキャッチをお考えになって提示をしていただけないかなと思います。細かいことはいっぱいおっしゃっていますが、よく分からないので、ポンと1つの言葉で訴えかけてくるような次の提示をしていただけたらいいなと思うんですけども、いかがでしょうか。

○事務局：ありがとうございます。

実は、ここが「仮」となっておりますのは、まさにおっしゃっていただいたことをやっている途中で、なかなか出てこなくて、もだえ苦しんでいるところですので、またその辺でご協力をいただけると、とてもうれしく思います。

○委員：あくまで案ですが、さっきダメ出しをされた「世界の琵琶湖になろう」をここに持ってきたらどうでしょうね。

○会長：この第三次中長期基本計画については、また次回も議論できるということですが、きょう出されました中では、特に研究体制の充実・確立ということについては、やはりこういうところにもきちっと明記されるということが大事ではないかというふうに

思いました。

さらに、もう一つ、研究体制とともに、やはり博物館ですから、資料の収集ということが非常に大事だと思います。これは博物館にしか打ち出せないミッションになるわけで、当然、博物館法にもまず最初にそれが書いてあるわけですから、今のこの案の中では、博物館が能動的に自然や文化の資料を収集していくんだということがどこにも書かれていないような気がします。とすれば、それはやはり博物館としてはまずいことで、琵琶湖に関わるいろんな資料をどういうふうにして、どういう方針で収集をしていくのか、あるいはこの博物館がどういうコレクションをこれから構築しようとしていくのかということを書いておかないと、皆さんが資料収集に出張に行くこともやりにくくなるということにもなってくるわけです。

さらに、収蔵庫がいっぱいになったときに、もっと収蔵庫を増築してくれと。展示のリニューアルが一段落した次は、やはりそちらのほうの充実ということが課題になってくると思いますので、そういう意味でも、資料の収集というのはやはり一つの大きなポイントになってくるんじゃないかというふうに思います。

それと、こちらの博物館は滋賀県立ということで、やはり中核的な博物館という位置づけになってくると思いますので、そういう中で例えば、県内の博物館のネットワークをどういうふう構築していくのか。大きな災害でもあったときに、そういう災害のレスキューというのを担っていく、そういったことも含めた博物館ネットワークとその中核という、そういう位置づけも当然出てくるわけですから、そういったことについてもこれから議論をしていっていただきたいと思いました。

○委員：私は、「ホタルの学校」を開いていまして、今年で17年目になります。最初から実は、ホタルだけではなく川の中の生きものを子どもたちと一緒に観察したいということで、学芸員の先生に来ていただいて、水生昆虫などの専門的な話を子どもたちにわかりやすく話して下さり、生きものを探す楽しさをいっぱい教えていただきました。ときには、貝のカワニナのことで、貝の専門の先生に来ていただいたり、魚の先生にも来ていただきました。また、夏休みにこちらのほうにお邪魔したときは昆虫採集をしたり、貝を採取したり、プランクトンを採取して顕微鏡で見て、琵琶湖の生きものに触れ、いろんな体験をさせていただきました。

そうした体験をした子どもたちは、のべ200人近くいるかと思うんですけども、その子どもたちと琵琶湖博物館に来るときは、船を利用しました。琵琶湖を感じて、そして琵琶湖博物館に来るといって、これはすごくインパクトがあって、大きくなった子どもたちに会うと、「ホタルや川の生きもの観察も楽しかったけど、船に乗って琵琶湖を見

て、琵琶湖博物館に行ったことがすごく楽しかった」ということを言ってくれます。琵琶湖を誇りに思える子どもたちに育ててほしいというのが私の思いなんですけれども、本当にここにいらっしゃる学芸員の先生方に、とってお世話になったことを感謝申し上げます。

それから収蔵品が非常に増えているということで、突拍子もないことかもわからないんですけども、お寺に秘宝展があるように、収蔵品をギャラリー展示などで、パーッといっきに出して公開するとかして、日の目を見るというか、そういう展示があっても面白いかななんて、ふっと思ったりしました。

すみません、ちょっと話が離れたところにいってしまいましたけど、とにかく琵琶湖博物館には本当にお世話になって、フィールドへの誘いをいっぱいいただいたことを感謝申し上げます。

○会長：ありがとうございます。進行の不手際で、最後になってしまいましたけども、すみませんでした。

(4) その他

○会長：それでは、きょうはこれぐらいで議論を終えたいと思いますけど、よろしいでしょうか。

長時間、どうもありがとうございました。休憩を挟む予定だったんですけども、それどころじゃなくて、失礼しました。マイクをお返します。

○司会（副館長）：山西会長はじめ委員の皆様、長時間にわたりまして、大変熱心にご議論していただきまして、ご意見のほうもたくさんいただきました。ありがとうございます。

今回いただきましたご意見、あるいはご趣旨等につきましては、また今後の博物館の運営に生かさせていただくと同時に、今度また第三次の新しい基本計画をつくっておりますので、検討させていただいて、そこにも反映できるものは反映させていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

4 閉会

○司会（副館長）：それでは、以上になりますが、先ほども申しましたように、2月に第2回の博物館協議会をお願いしたいと思いますので、ぜひまたご出席のほうよろしくお願いいたします。日程等につきましては、追ってまた調整をさせていただきます。

それから、この後、お時間がある方は、館内のほうをご案内させていただきます。

10月17日からスタートしました「守りたい！少なくなった生き物たちー未来につなぐ地域の宝物ー」という企画展をしておりますので、そこから始めさせていただいて、館内のほうをご案内させていただきたいと思いますので、お時間の許す限り、ご参加をしていただきたいと思っております。

本日はどうもありがとうございました。

[15時10分 閉会]